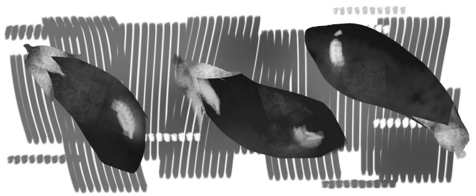
雪嶺集

〈宮坂静生 鑑〉



初夏

小林貴子

蓮見舟ふあさりふあさりと葉をかはし
潮の香のふつと茅の輪をくぐる時
梅雨夕焼ふところ深き人と居り
空ながめゐるは葡萄の房づくり
曇り日は怠けて良き日蛙の子
苧環の花の後ろを触手とも
様子見の蜥蜴腕立伏せの形
沖膾雲沈めても沈めても
野外劇長き領巾（ひれ）振り行つたきり
しやぼん玉劇団員の吹きまはる

青嶺雪

佐藤映二

直立のサーフィン夜干梅匂ふ
揺れやまぬ花藻大岡信顕つ
羊歯の森羽搏つ始祖鳥涼し涼し
花ユッカ牛の爪剪り小屋古ぶ
凄涼や急湍闇をとよもせる
姫神の振る領巾あはれ青嶺雪

四季と折り合う

佐藤映二

七月二十九日、第二十七回彩の国ベガ俳句大会が開かれた。彩の国は埼玉県の愛称、ベガは織女星から来る。会場は川口駅に隣接する、市の総合文化センター・リリオ。この催しを第一回から推進してこられた「紫」主宰の山崎十生氏は、講師に招かれた宮坂主宰と同じく、俳句を十四歳から始められたと伺う。

演題は「魅力ある俳句―六〇年安保以後体験的に」。先生の、いつものメリハリのある話しぶりに、百名の参加者が聴き入った。特に印象に残った二点を肝に銘じておきたい。

一つ目。桑原武夫のいわゆる「俳句第二芸術論」で彼の強調したかったのは、世に作られる俳句の九九％はマンネリで、五七五の形式を真に生かせる作品は一％だ、ということ。自分も一生に一句そういう句が出来れば本望と語られた。

二つ目。「地貌」に対し「風土」という呼び名には、都鄙（中央と辺境）を対比する視点の中に〈都〉優越の意識が見え隠れしてはいまいか。その土地その土地の対象を等しく愛しむように詠む前田普羅のように、これからも産土の土や水に着目しながら、地貌を再発見してゆきたいと結ばれた。